

週刊

夢の窓

No.2



むうにい

福くんとオランウータン

借りてきたBDを観ている。福くんが主役のドラマだ。

福くんは、金網のケージで、オランウータンを飼っていた。鶏小屋に使う、柔なケージである。見ていて、なんだか不安になる。オランウータンといえば怪力の持ち主だ。彼がその気にさえなれば、こんな金網ごとき、一息に蹴破れる。

福くんは金網越しに、オランウータンと穏やかに向かい合っていた。ジェスチャーを交え、たどたどしくも、愛情を込めて話しかけている。

オランウータンものんびりとしたもので、話しかけられるたびに、うんうんと、まるで言葉がわかっているかのように頷くのだった。

これで志村けんでもいれば、ゴールデン・タイムのあの番組そのものである。

わたしは、癒やされながらテレビを眺めていた。

金網の外側を、ネズミが這い上がってきた。大きさからして、ハツカネズミのようだ。

オランウータンは初めのうち、ただぼんやりとそれを見つめているだけだった。

(ネズミごときに動かされないか) わたしは思った。

ところが次の瞬間、オランウータンはカッと目を見開いた。あんまり大きく広げたので、二つの目玉がくっついてしまい、とうとう一つ目になってしまった。

「うわあっ！」福くんはびっくりして飛び退き、その弾みで尻もちをついてしまった。

わたしはそんな福くんに思わず、「ぷっ」と吹いてしまった。けれど、オランウータンの顔がアップで写された瞬間、背筋が氷ってしまう。

オランウータンはムクムクと巨大化していき、体のあちこちが醜く腫れ上がり、ばさばさと脱毛していく。赤黒く浮き出た血管が、全身をくまなく走る。剥き出した黄色い歯は剣山のように尖り、だらだらと唾液をしたたらせていた。

オランウータンの化け物が、金網をバリバリと引き裂いてしまうのは時間の問題だった。

わたしは怖ろしくてたまらなくなり、転げるように部屋から逃げ出した。

外に出たはいいが、ここは森の中の1軒家だ。街までは走っても2時間は掛かる。そして、今はまだ夜明け前で、辺りは真っ暗だ。夜鳥の気味の悪い声が、遠くから近くから聞こえてくる。

ポケットから携帯を取り出し、友人に連絡をしようとした。途中まで番号を打って、

「いや、待てよ。こんな時間に電話をしたら、さすがに迷惑だよな……」と、ふと冷静になる。

第一、あれはBDの中の出来事だ。何も心配はいらない。ポーズ・ボタンか、停止ボタンを押しさえすれば。

ところで、BDプレイヤーは本当に止めたっけ？ もしかしたら、再生中のまま飛び出してきたのではなかったか……。

わたしはまた震えてきた。

過去の街を歩く

夜の町を、わたしは歩いている。

見知らぬ町だと思っていたが、そうではなく、過去をさまよっているらしかった。それも、わたしが生まれるより、ずっと昔の。

寂しい通りがどこまでも続く。

空腹を覚え、コンビニを探すのだが、この時代にそんなものなどなかった。自動販売機さえ、見当たらない。

代わりに、小さな洋食屋を見つけた。表のガラス・ケースには、安っぽいメニュー見本が並んでいる。切れかかった電球に照らされて、色あせ、埃をかぶっていた。

立て付けの悪い引き戸をガタガタと開き、中へ入る。

「いらっしゃい……」店の奥から、60代くらいのおばさんが声を掛けてきた。

わたしはテーブルに着くと、

「今日のおすすめはなんですか？」と尋ねる。

ちょっと沈黙があって、おばさんは答えた。

「鯖の煮付け定食かしらねえ。あ、オムライスが付くよ」

「じゃあ、それをお願いします」わたしは注文する。

料理はすぐに運ばれてきた。

ところが、トレーに載った料理に手を付けようとしたとたん、するっとテーブルから落としてしまう。どうも、テーブルが傾いていたようだ。

わたしはあたふたとし、食器や割れたカップを拾い集める。

おばさんがやって来て、

「ほれ、いいから、いいから。あとはわたしがやっつくから、席に座ってな」と言う。おばさんは手際よく、散らかった料理を片づけていった。

申し訳ない気持ちで待っていると、再び同じ料理が運ばれてきた。

鯖の煮付けを盛った皿、オムライス、味噌汁、それから濃い黄色をしたスープがトレーに収まっている。

わたしは、また手を滑らせ、トレーごと床に落としてしまった。

おばさんは後片づけをしてくれたが、料理はもう、持ってきてくれなかった。

店を出たあとも、（あのスープはどんな味がしたんだろうか）などと、いつまでも気になって仕方がなかった。

それに、鯖の煮付けのおいしそうだったこと！

気がつくと、線路沿いを歩いていた。カンカンカン、と乾いた踏切の音が遠くから聞こえてくる。

この辺りは、わたしの知っている時代の面影をよく残していた。ふと、懐かしさが込み上げてくる。

自然と足が速くなる。

奇妙なことに、進むほど景色が様変わりしていく。

古い家が次第に少なくなり、道の舗装も整ってきた。自動販売機が置かれるようになり、その数もだんだんと多くなる。

どうやら、道は未来へ向かっているらしい。このまま進んでいけば、現在に戻ることができそうだ。

歩きながら考えた。

現在にたどり着いたとして、その先はどうなっているのだろう。未来の景色が広がっているのだろうか。もしも、踏み込んでしまったら、果たして戻ってこられるのか。

わたしは、後ろを振り返った。

洋食屋のおばさんが、虚ろな目をしてそこに立っていた。

プリンの風呂

夜の浜辺をのんびりと散策していると、丘の上に古い寺が見えてきた。

「ハーン、あれがマフィアのアジトだな」わたしはピンと来た。昼は住職をしているが、夜になるとこの界限を取り仕切る、闇の帝王なのだ。

わたしは好奇心を抑えることができず、丘へと通じる小路を登っていった。

広い庭園は、ヨーロッパ風だ。まるで作り物のように刈り込まれた植木が、幾何学的にどこまでも続いている。

広場の中央には噴水があって、その縁に数人の男女がだらしなく腰掛けていた。

彼らはみな、頭からすっぽりとビニール袋をかぶっている。ビニール袋は、透き通った青い水で満たされていて、時折、怪しげにぼーっと光を発した。

溺れてしまわないのだろうか、とわたしは心配をした。けれど、苦しむどころか、すっかり陶醉しきっているらしかった。

一種の麻薬だろう、と確信した。売りさばいているのは、もちろん、あの住職に違いない。

本堂にやって来た。洋風庭園の中で、ここだけが純和風の佇まいだった。それは異様なコントラストを見せていた。

「こんにちはーっ」わたしは大声で呼んでみた。

戸がすうっと開き、小太りな老人が顔を出した。

「ほい、何かな？」赤いガウンに赤いナイト・キャップをかぶって、まるでサンタクロースのようないでたちだ。

「あの、こちらにマフィアのボス兼住職がいると聞いてやって来たのですが……」わたしは、ありのままを告げた。

相手は顔をぱっと輝かせ、

「あ、はいはい。それ、わしです。海の水が塩っ辛いのも同じくらい、そいつは確かなことですわ」と答えるのだった。

わたしは丁重に招き入れられた。

「いやあ、はっはっは。表にいる連中を見ましたかな？ あの青い液体は、わしが開発したんですわ。けっこうな値段でさばけましてなあ。しかも、毎晩、買いに来てくれるんですわ。おかげで、ほれ。このような庭園も作ることができたんですよ」

住職は、わたしに風呂へ入るよう、しきりに勧めた。

「わしんとこの風呂はいいですぞ。とにかく、入ってごらんなさい。必ず、満足すること間違いない」そんなに素晴らしいのならぜひ、と入らせてもらうことにした。

「湯」と書かれたのれんをくぐると、そこは露天だった。ごつごつとした自然のままの岩を無造作に

並べ、ゆったりと広い。

月明かりが湯を黄色く染め、風が水面にしわを刻んでいた。

「へえ、なかなかじゃないか」わたしはザブンと湯につかった。とたんに、それがすべて、プリンでできていることに気づく。「うはっ、すごいな、この風呂っ！」

両手で救って、すすってみる。なかなかうまいプリンだった。空を見上げて湯を楽しみ、ときどきプリンを口に押し込む。こんな風流な時を過ごすのは何年ぶりだろう。

のれんの向こうから、住職の声がかかる。

「カラメルをバケツに汲んできたぞい。熱かったら、こいつで薄めるといい」

月はゆっくりと雲間を駆けていく。

宇宙船コンテスト

会場は熱気に包まれていた。今日は「宇宙船コンテスト」の開催日なのだ。

各自持ち寄った宇宙船の模型を審議し、最優秀賞のものは、なんと実機として制作される。しかも、処女航行にも同乗させてもらえるのだった。

スポンサーはビル・ゲイツ、それに映画監督のジョージ・ルーカスだ。宇宙船が完成したら、土星の衛星・タイタンへと飛び、ゲイツはそこに「マイクロソフト・タイタン事業所」を作り、ルーカスは「真・タイタンの戦い」という映画を撮るつもりなのだという。

それにしても、出品されている宇宙船の模型はすごい数だ。ざっと見て、1000点は軽く超えているだろう。

展示してある作品を、わたしは見て回った。

そこかしこにプロペラのついた、帆船型のものがある。宇宙には空気がないので、こんな構造は意味がないのに、とわたしは心の中でクスッと笑う。

スター・トレックに登場する、エンター・プライズ号そっくりの模型もあった。作者のラベルには、「完全なるオリジナル。宇宙で初めにこの形を思いついたのはボクです」と添え書きがしてあった。

内心、（嘘をつけっ）と突っ込まずにはおけなかった。

とある模型の前には、中学生くらいの姉妹が立っていた。

「これじゃ飛べないんじゃない？ だって、噴射するところないもの」姉らしい方が指摘する。その作品を見て、なるほど当然だ、と思った。

大胆にも、カニ型をした宇宙船だった。もっとも、それを「宇宙船」と呼べればの話だが。

スイッチを押すと、両手のハサミをカチカチと鳴らし、一生懸命にはばたく。それで宙を浮くことができれば、誰も苦勞などしない。

妹は少しむくれた顔をし、

「じゃ、お姉のはどんなの？」と聞いた。

「わたしのはこれ」姉が指さしたのは、ヒトデ型だった。この妹にして、この姉ありだなあ。

妹はケラケラと笑って馬鹿にした。

「ヒトデなんて気持ち悪いだけじゃん。カニの方が絶対、可愛って」

「あんた、馬鹿ね。別に可愛いからこの形にしたんじゃないの。UFOを見習って、こうしたんだから。UFOって、クルクル回転しながら飛ぶわけじゃない？ だから、ヒトデの形はうってつけなのよ」

なるほど、言われてみればもっともな理論だった。そうか、ヒトデは宇宙船にふさわしいんだな。

わたしは感心し、自分の作りかけだった模型に、ひと工夫しようと思いたった。

わたしの宇宙船はオーソドックスなロケット・タイプだったけれど、10本の触手を付け足して、イカの形に似せた。

「ヒトデが宇宙を飛ぶなら、イカだっていいはずだ」

それがわたしの確固たる信条だった。

今回のコンテスト、どうやら優勝は決まったな。

逃げたカエルを追う

部屋の中に、小さな茶色いカエルがぴよこん、と飛び込んできた。
続いて、芦田愛菜ちゃんが息せき切って駆けてきて、
「お願い、わたしのカエルちゃんを捕まえてっ！」と叫ぶ。

「よしきたっ」わたしは、カエルを追って、部屋中を走りまわる。
ついに隅まで詰め寄り、両手を伸ばす。あとちょっとのところまで捕まえられそうだ、そのとき、愛菜ちゃんがまた大声をあげた。

「ダメーっ！ そのカエルちゃん、猛毒なんだからっ。ちいちゃいけど、1匹で1万人くらい、殺しちゃうんだよっ！」

わたしはギョッとして、手を引っ込めた。ついでに、3メートルくらい後ろに飛びすさった。

「愛菜ちゃん、そういうことは先に言おうよ。うっかり、素手で触っちゃうところだったでしょ」
「ごめんなさい……」愛菜ちゃんのこういう素直なところが可愛い。「あっ、カエルちゃんが逃げちゃうっ」

カエルは、この隙とばかり、ぴよんぴよん跳ねていき、窓枠に飛び上がった。

悪いことに、窓は全開だった。カエルはくるりとこちらを振り返ると、ちろっと舌を出した。いかにも馬鹿にしたような仕草である。

「こ、このチビガエルめーっ」わたしはムキになって、窓に飛びかかっていった。
「毒ガエルだよおっ！」愛菜ちゃんに言われて、はっと思い出し、振りかざした手を慌ててその場に留める。

部屋を見回し、何かないかと探す。テーブルの上に、ガラスのコップが置きっぱなしだった。こいつで捕まえてやる。

コップを手に振り返ってみると、カエルはとっくに表へ逃げていた。

まずい、このままでは街中に被害が出る。

わたしと愛菜ちゃんは、急いで家を飛び出し、カエルを追った。
相手は大人の指先くらいの小さな生き物だ。それなのに、逃げ足がやたらと速い。なかなか追いつけない。

通りの角から、マツコ・デラックスがいきなり現れた。

1歩先を走っていた愛菜ちゃんが止まりきれずにぶつかり、ぼいーんと弾かれてしまった。
「ななな、何よ、あんた。大丈夫？」マツコ・デラックスが愛菜ちゃんをひょいっとつまんで、立たせてあげた。

「うん……大丈夫……ですう」

「道をやたらに走っちゃダメじゃないの。あら、あんた。愛菜ちゃんじゃない。いったい、どうしたっていうのよ」

わたしは、まだカエルがそこら辺にいるんじゃないかときょろきょろと目で探した。
すぐに見つかった。なんと、マツコ・デラックスの、ぽってりした腹の上に乗っていたのだ。
けれど、さっきまでの茶色ではなく、青に近い緑色をしていた。心なしか、ぐったりとして見える。

マツコ・デラックスに毒気を抜かれ、ただのアマガエルに戻ってしまったのだな。
そう、わたしは悟った。

A K B 4 8 と吉本芸人の戦い

グランド・キャニオンへ観光にやって来た。以前から、1度は訪れたいと考えていたのだ。

展望台からの眺めは素晴らしかった。

悠久の時を経て、風と水で深くえぐられた谷、ところどころ崩れ落ちた岩の壁、自然によるそうした荒々しい彫刻が、地平線の彼方まで、ずっと続いている。

備えつけの望遠鏡ではるか遠くを覗くと、赤茶けた岩のあちこちに人影を見つけた。拡大してみると、修道女の格好をしている。

「なんだろう。あんなところに教会でもあるのかな」わたしは不思議に思った。

ところが、よくよく見てみれば、彼女たちは修道女のコスチュームをしたA K B 4 8のメンバー達だ。そして、手には銃器を構えていた。

銃の向けられた先を望遠鏡で追ってみると、こちらはナチスの軍服に身を包んだ吉本芸人ばかりが集まっていた。彼らもまた、ライフルなどの火器で敵に狙いを定めている。

そのとき、ケンドーコバヤシの銃が火を噴いた。わたしは慌てて、反対側に望遠鏡を向ける。

篠田麻里子がどっと倒れる。身長があるので、標的になりやすいのだった。

篠田麻里子は、赤くなった額をさすりながらむっくりと起き上がった。声こそ聞き取れないが、明らかにぶつぶつと文句を言っている。

なんだ、銃は本物ではなかったのか。すると、これはサバイバル・ゲーム……。

岩の陰からBB玉が飛び出すのがはっきりと見えた。ちらっと見えたのは、たぶん、高橋みなみだ。小さな体を活かしての奇襲に違いない。

敵陣で、岡村隆史がもんどり打って、崖から転げ落ちていった。

ああ、あれでは助からない、と思ったが、器用に途中の出っ張った岩をしっかりとつかんでいる。まるで、ポケット・モンキーだ。

それにしても、なんだってこんなことに？

管理事務所から羽鳥慎一が現れ、事のあらましを説明してくれた。

「うん、あの連中は昔っからライバルだったんだよな。不毛な争いだけどね。つまり、どっちがより多く、笑いを取れるかってことをね、うん」

くだらないなあ、とわたしはあきれた。そもそもA K B 4 8って、お笑い芸人だったっけ？

「前田敦子は見えないですね」わたしが言うと、

「ああ、あっちゃんか。うん、卒業しちゃったよねえ、とっくに」

羽鳥慎一はこともなげに答えた。

シュワルツェネッガーの作る料理

まだ出しっぱなしのコタツに向かい合って座るのは、アーノルド・シュワルツェネッガーだった。巨体が窮屈そうである。

「えーと……」わたしは何か話そうと口を開きかけた。けれども、次の言葉が出てこない。

間が空いてしまって、何とも気まずい。話題になるようなことはないかと、あれこれ考えてみる。

そもそも、わたしとシュワルツェネッガーとの間には、共通の趣味すらないのだった。

緊張しているのシュワルツェネッガーも同じらしかった。

時折顔をあげては、ちらっ、ちらっ、とわたしの方を見る。明らかに会話の糸口を探っているのだが、何を話しているのかわからない様子だ。

沈黙のひとつときが続く。

その時、わたしのお腹がいきなり、グウ〜ッと鳴った。部屋の中がしんと静まりかえっていたから、ひときわ大きく聞こえた。

わたしは赤面して、思わずうつむいてしまう。

シュワルツェネッガーはコタツに手をつくると、パッと立ちあがった。

「あのう、我が輩が食事の用意をしますよ」

立ち上がったシュワルツェネッガーは、本当に大きかった。今にも天井に頭をぶつけるのではないかと、心配になった。

「いいんですか？ それじゃあ、お願いしようかなあっ」わたしは好意に甘えることにした。

シュワルツェネッガーは玄関で靴を履きはじめる。食材を調達しにいくらしい。

ドアから出ていく際、

「アイル・ビー・バック！」と言った。確かに、そう言った。

ほどなくして戻ってくると、台所で調理を始めた。わたしが覗きにいくと、

「まあまあ、我が輩にまかせて、コタツでゆっくりしててくださいよ」そうやんわりと押し戻されてしまう。料理をしている姿を見られるのが恥ずかしいらしい。

いい匂いがしてきて、いくらも待たないうちに湯気を漂わせた大きな皿が運ばれてきた。

「さあ、どうぞ。召し上がれっ」

皿には毛むくじゃらの黒っぽい肉が載っていた。おそろおそろ、ナイフで切り分ける。やたらと固い。

やっとの思いで自分の皿に取り、タレをつけて口に入れてみた。

「……うまいっ！」びっくりするほどおいしい肉だった。「これは何の肉ですか？」

「クマですよ。食べたことなかったですかねえ」

「へー、クマって、こんな味がするんだ。これはクセになるなあ」

シュワルツェネッガーはガオーッと迫力のある笑顔を作り、
「クマが食べたくなったら、呼んで下さいな。我が輩はいつだって、アイル・ビー・バックですから」

週刊 夢の窓 No.2

<http://p.booklog.jp/book/85254>

著者 : mueny

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/mueny/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/85254>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/85254>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ